
あの子を奪い返そう

レトルトメロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの子を奪い返そう

【Nコード】

N0072Y

【作者名】

レトルトメロン

【あらすじ】

あの子のために、
己のために、
戦おう
あいつらをぶっ潰して
あの子を奪い返そう

処女作です。
拙い文章です。

アドバイスや、感想等はやる気に直結ですw
誰かに楽しんでもらえるような小説にしたいです。

壱話

崩れた高層ビル、地割れだらけの道路と辺りに散らばった、血と肉。電柱は傾いたり、折れてたりと何処かの映画のワンシーンみたいだ。そこに、ボロボロで血が付いた服を着る血だらけの13歳の俺と、空間に漂っている黒い穴に下半身を飲み込まれたボロボロの黒のワンピースを着た■■■がいる。

「ごめんね……彩輝^{さいき}。あんたまで、こっちに来る必要はないよ」

そう言つて、■■■は僕の手を離す。

待つてよ、そう声を出したはずなのに、喉からは擦れた音しか出ない。

手を伸ばすけど、届かない、届かない、■■■はぽっかりと開いた穴に飲み込まれて、消えた。

最初から何もなかったように……

ここで、僕の夢は終わる。この夢も今では月に1、2回しか見なくなつた。

前は、何度も何度も見てたのに。

けど、あの子の名前が、あの時から思い出せない。

最初から知らないかのように。

でも、あの子との思い出がある。

『彩輝ー、起きてるんでしょー。早く降りてご飯食べなさい』

下から、母さんの声が響く。

あー、そうだね、学校だわ。

ベッドから降り、寝巻きのスウェットを脱ぐ。

部屋のクローゼットから、制服を取り出して着替える。

最後にベット下にある引き出しから、靴下を取り出して履く。

『ちよつとー、彩輝ー。ご飯食べる時間なくなるわよー。あんた今日体育あるんでしょ？ぶつ倒れても知らないわよー』

あー、はいはい。今からありますよつと。

ベットの脇にある机の上から、携帯と財布を取ってポケットに入れてつと。

あとは、腕時計をつけて。

うん、忘れ物はないな。

さっさと下に下りて、ご飯食べるか。

「降りてくるの遅いわよ。あんたもう高2なんだからしつかりしなさいよ。ほら、顔洗って、髪を整えてきなさい」

「はい。あ、母さん、今日帰ってくるの遅くなるかも」

「そう、日付が変わる前には帰ってきなさいよ」

「うん。じゃ、洗ってくる」

「とつとと、行って来い」

うーむ、今日の朝ごはんは、スクランブルエッグとトーストか・・・

・
俺、ご飯派なんだけどなー

まあ、作ってもらってるだけありがたいか。
顔を洗って、眼に少しかかる前髪を整えて、後頭部の寝癖を直して、最後に前髪をワックスで左に流してつと。

うっし、完璧ー。

さあ、ご飯喰うぞー。

「あー、鞆に教科書とか詰め込んであげたから、しっかり食べなさいよ」

「あざーっす」

うんうん、旨い。

ちよつと塩辛いけどね。

「彩輝、いつ家を出るつもりなの？」

「8時かなー」

「そう、今8時15分よ」

「そつかー。まああと45分もある・・・え？8時15分・・・！？」

壁にかかっている時計を見る。

8時15分、どこから見ても8時15分だった。
ちよッ、遅刻！

「早く言ってくれよおおお」

「人のせいにしてんじゃないわよ！さっさと行け！！」

鞆を掴んで、玄関に向かって走る。

家から、学校までチャリで30分。

全力で漕げば15分で着くと思いたい。

今は冷静に尚且つ、急いで。

チャリのカゴに鞆突っ込んで、勢い良くチャリに乗る。

うおおおおお、ぜってえ間に合ってやる！

今日遅刻したら4連続になる。

そうなれば、ゲイン（ゲイのゴリゴリ先生）と2人で生徒指導室行きになっちまう。

俺の後ろの処女は誰にも奪われたくない。

学校までは、ほぼ一本道だが、途中に坂がある。

そのことを考えて、全力で漕ぐ。

良いタイムで坂に着いたが、熱い。

やっぱ、カーディガンを鞆に入れてたら良かった。

そう思いながら、必死に坂を上る。

足が、軽くしびれてきたが校門が見える。

校門の前では、ニヤついたゲインが俺を見ている。

腕時計を見る。

ヤバイ、あと一分だ……。

体に喝を入れて、必死に漕ぐ。

大丈夫だ、間に合う。

あと十数秒の所で、校門をくぐる。

後ろからは、大きな舌打ちが聞こえる。

ああ、セーフ。これで俺の後ろの処女は守られた。

鞆からタオルを取り出して、汗を拭う。

自転車置き場に止めて、学校に入る。

「おーっす、彩輝。間に合ったかー、隣の組の吉田はゲインと放課後だ。てつきりお前も混じるかと思ってたのにー。やっぱ、彩輝女みたいな顔つきだし、身長も170ぐらいだろ？ゲインいつもお前見てんぜ」

「うつせー、死にたくなるような事言っな山田。俺の処女は誰にもやらん」

ニヤニヤする山田^{やまだ じゅん} 純遅刻仲間なのに、けっして連続では遅刻しない賢い(？)奴。
甘いマスクに、成績優秀黙ってたら、ファンクラブできるぐらいの癖に、口を開けば8割下ネタ。残念すぎるイケメン。

「つまんねー。あ、次『魂学？』だぜ」

「うあ、だりい。『魂学A』ならやる気出るのに」

「ああー、わかる。座学より実技だよなー」

「だよなー。まあ、こんな所で愚痴っても、何にもならんし、上がるか」

「おう」

だるそうな山田の背中をみながら、階段を上る。
汗が蒸発して、寒くなってきた。

階段を上り終え、2-Bのクラスに入る。

「彩ちーん。ゲインと交わるんー？」

「死ね、高田^{たかだ}」

茶髪で短めな頭髪に小学生みたいな身長の高田^{たかだ} 恵^{けい}。
俺を『彩ちん』と呼ぶ巫山戯た野郎。

「つまんねー事に、ギリギリ回避しやがったよー」

「山田、お前も死ね」

「長谷川君、よかったねー。ゲインとの肉体関係回避できて」

軽い口調で、俺の席の前に座る吉田^{よしだ} 憂^{ゆう}。
黒髪ロングで、身長も低く可愛い女の子。
言うことは、ストレートすぎて恐いけど……。

「ああ、おはよう吉田」

「うん、おはよー。あつ、きーちゃん」

あつ、残念美人が来たか。
吉田を溺愛する平^{たいら} 喜衣^{きい}。

茶髪のショートカットで、モデルみたいなスタイルをしていて、非
公式のファンクラブがあるぐらいモテてる。まあ、告白してもすべ
てをばっさり断っている。きっと、吉田以外眼中にないんだろう。

「おっはよー、憂。良い子にしてた？私がいなくて寂しくなかった
？変なおじさんに話しかけられたりしなかった？」

「昨日、あんなに遊んだじゃん。あと、話しかけられてないし、子
供扱いしないでよッ」

「うーん、無理」

「なんでッ。いつもいつも……」

うあー、朝から五月蠅いなー。

鞆から、勉強道具を取り出す。

そして、茶で一息つく。

「うおーし、席に着けー。魂学？の時間だぞー」

初老のおじさんが入ってきた。

皆ノロノロと席に着く。

「みんな着いたなー。よし、おさらいだ。高田『魂憑』の説明と起源、魔素のでき方を答えろー」

「ういーっす。イカレタ学者が集まった組織が発明した装置で、別世界に繋がってるその世界の住民が1人と、大量の魔素がこっちの世界に流れてきました。魔素は樹に変異を起こし、魔素を作り出す細胞が作られ、今、この世界は空気のように魔素が漂っています。その魔素を利用し、人間が使っていないかった脳の領域を使用できるようにになりました。また、流れてきた住民から、この魔素の使い方を聞き科学者が完成させたのが『魂憑』です。『魂憑』は、魔素を取り込み己の魂と反応させ、魂の性質を顕著させる技術です。まあ、人によって様々な性質を持ち、能力も様々です。また、ランクがあり、この世にいる動物を模しているのはN、童話や、神話にできる生物はRです。当然ランクにより、能力の強弱があります。また、熟練度が高い者は性質をもう一つ引き出せることが出来、最後に確認されていますが、2つの性質を混ぜて顕著させることが出来るん

だそうです」

「完璧だ。さすが主席だな」

「あざーっす」

小学生みたいななりをしている癖に、本当に賢いなあいつ。

俺もあれぐらい、ペラペラ話せたら欠点なんて考えなくてもいいんだがなー

「次は『魂憑』を悪用している組織名と、いつ出来たかを答える山田」

「俺っすか・・・、組織名はThe snake which invites a crime 《罪を誘う蛇》っす。奴らは『魂憑』が世に出てすぐに発足しました」

「正解だ。じゃ、教科書の48ページ開け！。今日は、ほんの5年前の事をするぞ。5年前に起きた事を、吉田」

「The snake which invites a crime 《罪を誘う蛇》が、起こした無差別テロです」

嫌な話だ・・・。

第一、この範囲はまだ先のはずなのに。

「正解だ。奴らの目的は不明だが、化け物を召還するスキル持ちがいた事によって、東京は壊滅した。だが、奇跡的に2、3百人の死者ですんだ理由を山田」

「また、俺っすか・・・えーっと、1人の少年と1人の少女の活躍によってです」

「そうだ。少年は恐らく狼の性質で、少女は竜神の性質だった。少女がThe snake which invites a crime 《罪を誘う蛇》のメンバーの足止めをし、少年が化け物とスキル持ちを倒したことによって、最悪の事態は免れた。だが、少女は失踪、少年は致死量の出血を残して、その場から消えていた」

「2人とも死んだ訳っすか？」

「山田、手を上げてから質問しろ」

「あ、すみません」

「俺の憶測だが死んではいないだろう」

ああ、生きてるよ。きつとあの子も。

もう、寝よう。気分が悪くなってきた。

教師の声をBGMに睡眠に入る。

あの子は、The snake which invites a crime 《罪を誘う蛇》に捕まっているのだろう。

早く助けるために、性質の合成を完成させない・・・と・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0072y/>

あの子を奪い返そう

2011年11月13日11時50分発行